

# 弥生時代移住論覚書 '07

● 石黒立人

## 移住への照準

遺跡の消長表を見るまでもなく、遺跡には当然の如く〈始まり〉と〈終わり〉がある。ところが、消長表を作成する行為そのものに端的に表されているように、遺跡をめぐる議論の多くは存続期間と並行関係についてであり、当該の遺跡の〈その前と後〉について問われることはまずない。短期か長期かと問われることはあっても、どのように始まってどのように終わったのか、ましてや遺跡を残した人々がどこから来てどこへいったかなど、全く関心が無いかのようである。この点で、最近隣遺跡群を有機的関係態と看做して設定される「遺跡群」概念も、実は未証明の連続性を前提にしている点で、問題を残す。むしろそれは一定領域の排他的な完結性を前提におく遺跡概念の拡張にすぎない。果たして、人々は数キロメートルの範囲を移動するだけの歴史を連続と続けているのであろうか。むしろ、人々が最近隣遺跡に縛り付けられるならばその理由をこそ明らかにすべきであろう。遺跡とはその場所で人々が活動したことの結果に過ぎず、探るべきは人々の動向である。遺跡が自ずと大地から生まれ、埋没するわけではない。遺跡に遺されることがなかった人々のありかたこそが、文化、時代につながっていく。

重要なのは、考古学的にどのような解答が用意できるかではない。過去とどのように向き合うかである。21世紀を迎えていたずらに領域的な独自性を欲しているきらいがある考古学の表層は周辺を積極的に取り込みつつ肥大化しつつあるが、むしろそのために失われているのは、過去と向き合うことの首尾一貫性であり、過去と向き合う根底的な構えである。

さて、「定住」と対になるのは「移住」である。移動とは、物品を含めたあらゆる事物の空間的

な位置の変化であり、移住もその一部であるが、移住とはあくまで人々の側に引き付けられた概念であり、〈生と死〉の行動様式の一体性・完結性を前提にしている。そして単に空間的な位置の変化にとどまらず、新しい枠組みへの移行を含意する。だから、距離にはとらわれない。

移動は生活および社会的環境の連続とは無関係だが、移住は新しい世界の創造につながっている。移動距離の遠近は結果であり、最近隣関係もあくまで分析の結果としてあるに過ぎない。

定住とは空間的には静止状態であり、それをつなぐネットワークも静態である。しかし、それが動きへと向かうのが移住であるが、そこで必要なのは人々を浮上させる確かな分析である。人々こそが対象である。社会が人々からなり、人々の具体的な動きが社会に影響を与え、また人々の活動が社会から影響を受ける相互関係が基本であるならなおさらである。

## 居住の〈始まりと終わり〉

ある集落遺跡における居住の始まりは、初期の居住遺構が検出されて初めて確定される。ところが、短期の居住ならともかく長期の場合には遺構の重複も激しく、検出はほとんど絶望的である。そこで、遺跡において最古の土器が求められることになる。つまり遺跡の消長に絡めて居住の始まる時期を推定しようというのである。つまり、最古と最新の土器を探ることによって存続期間を推定しようというわけだが、しかしここに大きな問題がある。

土器編年は、土器の変化を指標化して年代を決める手法である。基本的には対象資料を古・新に二分しつつ前後に連続させるわけだが、空白の存在を想定できる確証は無く、切れ目の無い連続を保証しない。これは近年、隆盛を見せ

始めているAMS年代測定を行っても同じである。AMS年代測定では当該試料の年代が算出されるのであって、不連続が基本である。このように、切れ目の無い連続を土器編年は保証しないので、それを適用したところでただ始まりと終わりの幅を示すに過ぎない。

したがって、ある集落の始まりと終わりを推定し、それ以前は「いずこから来て」、それ以後は「いずこへ去る」というように言ったところで、実はその間において短期的に同様のことが繰り返されていなかったとは言えない。とりわけ、沖積平野などの低地に位置して、遺構面が洪水砂などで被覆されているような場合にはなおさらである。少なくとも断絶が認められるのであれば、その空白を挟んで「いずこへ」「いずこから」となるはずだからである。

問題は、断絶がこのように明示的に把握できない場合でも、短期的なリズムが無いとは断定できないことである。集落は単なる入れ物ではない。人々を欠いて集落が存在することはない。人々が自らの生を実現する場が集落であり、その痕跡が集落遺跡におけるさまざまな遺構群であり遺物群であるはずだが、われわれの思考対象は往々にして遺構に重心移動してしまうようだ。つまり、遺構の固定性に影響されて、集落を連続するものと看做してしまう。遺構群が同時性の累積であることを忘れて、遺構の累積を単に大規模さと誤解してしまう。

人々を欠いた遺構群の連続とはまさに集落の容器化である。繰り返して言うが、遺構は痕跡であり、集落遺跡とは廃墟である。そこにおいて死は事実だが、生は仮想するしかない。だからこそその思考である。

とはいえ、やはり〈生と死〉の両面に視線を注ぐ必要がある。集落遺跡における生は居住、死は埋葬であり、その両者がどのような関係にあるのか、集落の動態をめぐる思考はその地点から始まる。

## 〈集落〉と区画

集落とは、生態的環境に規定されつつ、居住デザインに基づいて人工的に構成された景観であり、近代以前においてその関係は時代を問わ

ず通底した。むしろ時代を前提にした集落像の変遷こそが幻想に過ぎない。確かに、縄文時代を境に定住は表面化するが、弥生時代以後は時代区分を前提に集落論が行われることもままあり、それこそが現代考古学の限界を示している。

集落の表現法のひとつに量的表現がある。それは目にみえる遺構群を量化することであり、わたしたちは建物の数を居住人口に関係するものとしてカウントする。人々に直接関係するのが建物であることは間違いなく、同時存在の建物（この場合、倉庫を除外する）が把握できれば棟数ではなく、床面積の合計を算出する方が居住者数の実態に近づくことができるかもしれないと考えるが。しかし、もう一つの集落の広さを規模に置き換える表現法は、建物の密度が一定でなければ価値はない。散漫に広がった集落（散在的集落）を大規模、建物の間隔が詰まり稠密な集落（集住的集落）を小規模としたところでこの場合居住人口には比例しないからだ。密度の粗密そのものが検討されるべきで、単純な量化には適さない。

わたしが注目したいのは集落内部における区画の有無である。縄文時代にも集落の空間分割はあり、景観的にも把握できるようだが、弥生時代のように溝や柵で区分するような事例は稀有である。もちろん、弥生時代にもこうした事例が決して多くはないが、しかし、朝日遺跡をはじめ、唐古・鍵遺跡、八日市地方遺跡、松原遺跡などの大規模集落では集落の居住域が同じように物理的に分割されている。ここでは分割とそれに対応する単位の存在に注目したいわけである。

集落が複数の単位から構成されていることは、ある意味で常識である。方形周溝墓群などは複数のグループから構成されているのが通例であり、それが居住集団の構成を反映していると見ることは可能である。居住域も複数の建物群に分かれ、それが居住集団の構成を反映していると看做されている。だが、居住域まで物理的に分割される例はそれほど多くはない。この場合、居住域を分割することで何が表現されているのかが問われるべきだろう。

分割された対象が集落内の機能区分であれば、集落の一体性はかえって強調される。しか

し、ここで扱う分割単位はおそらく機能区分ではない。集団差に対応していると考えられる。一つの血縁系譜によってまとめられる集団を親族集団とすれば、その集団が一つの集落を形成する場合もあれば、その分枝が一つの集落を形成する場合もあろう。あるいは複数の分枝が集まって一つの集落を形成することもあり、この場合が多く遺跡で認められる構成単位に相当しようか。となれば、溝で分割されるなどというのは、それらを超える遠い集団、つまり出自を異にする以上に全く無関係な集団の並存を示している可能性が高くなる。だから、集落が複数の集団単位から構成されるということとは次元が異なる議論になる。

朝日遺跡や八日市地方遺跡などの大規模集落は中期前葉にはすでに大規模であり、徐々に拡大するわけではない。そして中期後葉の凹線紋系土器期には衰退に向かう。唐古・鍵遺跡の場合も前期・中期・後期の一貫した連続性が強調されるけれども、場所の連続は認められても、一つの集落史的な連続であると断言できるほどに資料が揃っているわけではない。

当初から大規模であるこれらの集落は、通常の集落を構成する規模の単位を複数組み込んで形成されている。複数の集落を集めた程度に大規模なのだから、全体が同一の親族集団とは考えられない。その結果が集落内における物理的な空間分割ということになる。

大規模化に必然性があったのかどうかはわからないが、少なくとも大規模化への動きが始まるや否や血縁・非血縁や農耕民・非農耕民を問わず、近傍・遠隔地からの人々の移住が行われ、大規模集落を形成したと憶測する。そこに権力が介在したのかどうかはわからないが、調整機構：権力は存在したかもしれない。

### 大規模集落のネットワーク

八日市地方遺跡では分銅型土製品が出土している。搬入品だけでなく在地品もあり、しかも模倣的変容はしていないので、日常的に分銅型土製品を使用していた人々、つまり集団の規模はわからないが瀬戸内周辺地域からの人々の移住を示している。いっぽう、朝日遺跡では考古

遺物に何も現れていない。他地域の土器が集中する地区など、まったくもって認められない。しかし、考古遺物そのものに移住を直接に示す証拠が無いとはいえ、荷車が無い弥生時代に家財道具一切を運ぶような移住があったと考える必要も無いわけで、規模が大きいとは思えないものの、いちおうは玉生産に関係して移住があったのだから、移住を許容する条件はあったはずである。

朝日遺跡と八日市地方遺跡を比較すると、朝日遺跡では北陸産品を認めたいが、八日市地方遺跡には貝田町式細頸壺（貝田町式Ⅰc期：近畿Ⅲ-Ⅰ様式）や朝日形長身鍬、縦櫛などがあり、朝日遺跡と共通している。物品の移動は人々の往来を示すが、それが移住をも示すのかが問題である。

この点で、遠隔地の人々が偶然出会い、交流を継続するモデルは現実性が無い。親族集団の分枝が遠隔地に播居し、そのネットワークを介して人々の往来が保障され、受け入れ先があって遠隔地間の安全な交通が可能になる。まず、移住によって親族集団の分枝が遠隔地に播居する、それが起点であり、契機だろう。こうした外来者を許容しやすいのが大規模集落なのであり、単一の親族集団が営む集落では外来者が果たして受け入れられたのかどうか。このように考えると、大規模集落だから遠隔地との交流が行われるというより、居住者のネットワークが遠近で錯綜しているのが大規模集落だから多様な情報が集まるのだといえる。

### 水田開発

可耕地が開発され尽くすまで水田開発が進むのか、あるいは水田稲作技術が進展するから水田開発も進むのか、いずれにしろ弥生時代の基盤的な生産活動が水田稲作なら集落の動態と水田開発は同期する。そして、水田開発が進めば集落の位置も影響を受けることになるだけでなく、集落も可耕地に含まれる場合には最終的に水田化されて、集落も移動を余儀なくされる。しかし、水田経営のために小集落が定期的に移動するのは、移住ではない。自らの居住地を水田化するために立ち退くのも移住ではない。移



動はシステムの修正であり、移住は旧システムからの離脱、新しいシステムの形成（あるいは新しいシステムへの帰属）だからだ。水田開発に伴う移住とは新天地（フロンティア）への移住だが、実態は土地の略取であり、弥生後期の環濠集落の叢生はそうした事態への対応策である。

### 土器型式圏の拡大

土器には分布が広域化する型式と、拡大しても隣接地域に限定される型式がある。前者は画期に連動し、遠賀川系土器、櫛描紋土器、凹線紋系土器などがある。これらは地域を超えて広がるだけでなく、初期には型式としての安定性を保ち、後に拡散して在地化する。西日本では拡大を文化伝播とし、東日本では人々の移動（移住）に関係づける。一方が現象を指摘し、一方が背景を指摘しているわけだが、それはどちらにも当てはまることである。

すでに一定程度の密度に集落が分布し、かつ固定されたならば文化伝播説は可能かもしれない。しかし、新しい現象が集落の形成と一体的に始まるなら、そこに伝播でなく新たなる人々の出現を見るべきではないのか。つまり、移住があったと。

遠賀川系土器、凹線紋系土器は在来からの技術伝統に一致しない外来技術により製作され、器種組成も同様に伝統的生活様式には合致しない。とりわけ初期は在来系土器と明確に分離して共存するわけで、技術交流も無い。在来・外来という2系統の技術が並存する状況を、技術論に矮小化するべきではなく、それは社会論になるはずである。技術論では外来系技術の並存は学習によって可能になったと説明するが、誰がどのように伝達したのかが示されていない。活発な交流を前提にして同時多発的に産み出されたというのは、具体的な説明を放棄している。

集落がすべからく定住集落であり、基点足りえたという前提のなかで技術拡散を説明することは可能だが、しかしそれは実態に合わない。ましてや、移住を挿入するならそうはならない。そもそも、自らの伝統的技術を放棄してまで何故他地域の土器型式を受容する必要がある

のか。コミュニケーション的には圧力がなかったからであり、それこそが外圧である。空間的に分離した上での接触では強い圧力にはならない。空間的に重複したからこそ圧力になったのであり、まさに人々がせめぎあったのである。

### 移住と弥生社会

弥生時代の灌漑型水田稲作は縄文系の人々が自力で始めたのではない。西方から稲作民が移住し、その周辺で交流が始まるなかで、各種素材を稲作民が在地で入手するなかで、在来民の狩猟や漁撈の成果物を稲作民が入手するなかで、さらに灌漑施設や開田作業における協業を進めるなかで、技術が伝わった。それが始まりである。濃尾平野では中部高地系の土器型式も成立しているので、山地民も低地に下りて加わったのだろう。その一方では、強固に自らの作法を守った人々もいたであろう。すべてがコメになびくわけではない。濃尾平野についてみれば、弥生前期の稲作民集落はそれほどの増加をみなかったで、社会の規模は小さいままであった。それが弥生中期になると、朝日遺跡のような大規模な集落がいきなり成立した。

大規模集落は、手工業生産を網羅的に行いかつ持続するための物流網の整備、社会的結合を拡張・維持するための《デザイン》の共有、玉の生産と配布、銅鐸の鑄造・配布、さらに社会的統合に向けて秩序を確保し持続するための方形周溝墓制の導入や中・小集落を含む集落群の有機的な結合など、これらと一体に、あるいは主導しつつ中期前葉に成立した。稲作民や漁民（海人）、狩猟民（山人）を含みえた朝日遺跡は出自を問わない集落であった。

凹線紋系土器期に西方から人々が襲来した。伝統を消し去り、新たなシンボルの形成に向かった。社会は流動化し、大規模集落は影をひそめ、長期継続よりは短期廃絶集落が目立った。つまり、移動・移住が基調となったのである。弥生後期から古墳時代へと、この動きは継続した。しかし、特定の地域に情報は集中し始めた。それが、実質的な交通の要衝・結節点である。社会の再編成はそこから始まった。